様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　７ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：２２４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2024
課題番号：２０Ｋ１０７５８

研究課題名（和文）患者の死に曝され続ける中堅看護師の看取り力深化を目指した態度教育プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of Attitude education programme aimed at deepening the mitori of mid-career nurses

研究代表者
平野　裕子（Hirano, Yuko）

埼玉県立大学・保健医療福祉学部・准教授

研究者番号：４０３６９３７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、患者の死に曝され続ける中堅看護師の看取り力を進化することを目的とした態教育プログラムを作成・開発した。その結果、スコーピレビューにおいて看護師の死に対する態度は9つの態度と3つの関連要因が存在することが明らかになった。また、がん看護専門看護師を対象にした調査を基にプログラムを作成し実施したところ、自由記述で参加の応は概好評であった。しかし、既存尺度では研修後に大きな変化はみられなかった。このから、態度育成プログラムには研修内容や方法に改善の余地があること示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
多死社会の到来により、quality of deathに対する関心が高まるなか、患者の死を看取る中堅看護師の態度を明らかにし、支援体制を構築してくことは急務である。特に「ご遺体」となった患者の死と向き合うことで生じた看護師の思い、行動などを踏まえ、看護師自身の死への態度を見つめ直すことは、患者や家族の予期悲嘆への支援を考える上で重要であり、患者個々のquality of deathを尊重する上でも重要である。

研究成果の概要（英文）：In this study, I developed an attitude education and training program aimed at evolving the mitori skills of mid-career nurses, continually exposed to patient death.
I conducted a snsiysis The results revealed that there were nine attitudes and three associated factors for nurses' attitudes towards death in a scoping review.
In addition, when the programme was developed and implemented based on a survey of specialist oncology nurses, the response to participation was generally favourable in the free response.
However, existing measures did not show significant changes after the training. This suggests that there is room for improvement in the content and methods of the attitude development programme.

研究分野：看護学

キーワード：看取り　態度　中堅看護師　教育プログラム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

多くの看護師は、日常的に患者の死を看取る体験を繰り返すなかで終末期にある患者へのケアの前向きを獲得し、自己の生命観や死への態度を発展させている。しかし、看護師は患者や家族の不安や恐怖に付き添うなかでとともに悩み，苦しむことが多い。特に、最期まで精一杯ケアした患者の死は悲しみ、心残り、無力感などの喪失悲嘆をもたらし（広瀬，2011)、混沌とした不安、重圧感、心身の疲労などが、踏み込めない、逃げ出したいという患者に関わる困難感を生み出し（坂下，2008)、70%が看取り後に悲しみや疲労感、無力感による自責の念や不安感を抱いている（坂口ら，2007）状況にある。

看取りに関する現任教育は、2000 年以降、死化粧のあり方に苦言が呈され、スペシャリスト看護師を中心に OJT のなかで知識・技術が見直された。しかし、看取り観や死への態度の育成、発展は配属先で指導的役割を果たしている中堅看護師の力量に委ねられ看取り教育は拡大されているが、十分ではない。

以上のことから看護師が伴走者として患者の尊厳ある最期に寄り添い続けるとともに家族のグリーフケアにつながる質の高いケアを実践するためには、看護業務の中核的役割を果たす中堅看護師の看取り力を高めることが重要であり、知識、技術だけでなく看取り観や死への態度を発展、深化させることが急務である。

２．研究の目的

患者の死に曝され続ける中堅看護師の看取り力深化を目指した態度教育プログラムを開発するために、①看護管理者を対象とした中堅看護師の看取り観や死への態度に関する調査、②中堅看護師を対象とした看取り観および死への態度に関する調査を踏まえ、看取り観や死への態度を深化させるために必要な要素を反映させた教育プログラムを作成する。

３．研究の方法

研究助成を受けた年に COVID-19 の蔓延により、研究方法の変更を余儀なく求められた。よって下記のように変更し、実施した。

1）看護師の死への態度に関する文献検討

医学中央雑誌 Web を用いて、日本において死生観などの研究が盛んとなり始めた 1990 年度以降に発表された原著論文で、キーワード「看護師」and「看取り」and「死への態度」を検索し、目的に合った文献を PRISMA-ScR のガイドラインに従いスコーピングレビューを用いて抽出した。また、抽出された文献から「死への態度」の定義を確認したのち、態度に含まれる内容を類似性に基づき整理した。

2）がん看護専門看護師を対象としたインタビュー調査

看護管理職および中堅看護師を対象に看取り観や死への態度に関する調査を実施する予定だったが、COVID-19 の影響で管理職へのインタビューが難しく、その間に内諾を得ていた管理職の退職が続いた。そのため、対象者をがん看護専門看護師に変更し機縁法にて 11 名に調査を行った。

3）看護師の死への態度の深化を目指した教育プログラムの作成実施

死に逝く患者を看取る看護師支援プログラムとして「死に逝く患者を看取る上で必要な態度とは？　～日ごろの体験をみんなで話し合ってみませんか～」を開催し、プログラム前後に調査を実施した。対象者は、患者を看取る経験をしている看護師とし、態度を考える上では知識、技術を持ち合わせていることが望ましいことから ELNEC-J コアカリキュラム看護師教育プログラム修了者が望ましいことを付け加え募集した結果、15 名であった。プログラム内容は、看取る態度に関する説明後、3-4 名のグループに分かれ死への態度に関するディスカッションをし、全体共有、がん看護専門看護師教育経験があり、自身もがん看護専門看護師である大学教員による総評とした。

４．研究成果

1）看護師の死への態度に関する文献検討

文献検討で 8 要素を抽出したが、スコーピングレビューの手法を用いて再分析を行った。結果 54 文献が抽出された。看護師の死への態度には明確な定義はなく、「態度」のみを定義している文献が散在している程度だった。そのため、死生観と死への態度の違いを明確にするため，死生観は死と生にまつわる価値や目的などに関する考え方で、感情や信念を含む行動への準備体制（岡本ら,2005）とした。そのうえで、死への態度については死に対して生じる感情や意志を動作・表情などの外面に表れたふるまい、心のかまえ、考え方、行動。何かを選択，決定する際に根拠として働いていると考えられる知識（唐沢，2010：吉田，1999）であることを参考に、看護師の死への態度は看護師が患者の死に対して生じる感情や意志、表情などの外面に表れたふるまい、心のかまえ、考え方、行動とし、患者の死に対するケアを選択、決定する際に根拠として働いている知識や好意的、非好意的な反応とした。

体調論文から抽出された看護師の死への態度は、看取る役割を果たすために必要となる知識やスキル、責務などのケアに臨む基本姿勢といった心構えを持ち、多職種、看護師間でよりよい看取りとなるようケア連携しながら患者や家族のニーズを満たすためのケア行動をしていた。また、看護師は患者の死にかかわることで思うようなケアができない葛藤や苦悩だけではなく、自己成長やケア意欲を獲得するなど看取ることで生じる看護師個人の死やケアすることへの考えを持ち合わせていることが明らかになった。さらに、これらには自己の経験した死別や看取り、学習機会や関わることへ前向きな姿勢が影響していることも明らかになった。

2）がん看護専門看護師を対象としたインタビュー調査

がん看護専門看護師 11 名の内訳は、平均看護師経験年数 25 年（18-35 年）、がん看護専門看護師歴 9.8 年（4-18 年）、緩和ケア病棟経験者は 4 名おり、3-10 年の経験があった。また、管理職は 5 名おり、副看護部長 2 名、副師長 3 名であった。

がん看護専門看護師は、患者の QOL や QODD を尊重するためには患者が体験している苦痛を除去することを大前提にケアにかかわっており、特に、他者にはなかなか理解されづらい目の前にある身体的苦痛を除去することに主眼を置くケアを基盤とした行動をしていた。また、シームレスなケア提供を心掛け、急な看取りとならないよう、患者の ADL や身体状況、PS などの情報を把握するなど外来化学療法室や認定看護師、ジェネラリスト看護師との連携を図りながら患者が最期までやりたいことができること、希望する療養場所で最期を過ごせるよう調整していた。家族に対しては意思の方針を計画にすること、患者の希望を伝え、家族がどうしたいのかのタイミングを逃さないよう決断を促すよう調整していた。さらに、ケアを行うにあたり、患者や家族の思いをきちんと受け止められるよう、全人的な視点をもって対象理解に努め、ちょっとした変化に気づけるよう患者や患者の生活に関心を寄せることを意識していることなどが明らかになった。

3）看護師の死への態度の深化を目指した教育プログラムの作成実施

看護師の死への態度は、看護師それぞれが基盤となる考えを持った上で行われるケア行動がなされるが、患者の死にかかわったことをどのように意味づけるかによって好意的、または非好意的な反応に分かれることから、死に逝く患者を看取る上で必要な態度とは何かを自由に語り、日ごろ行っている「患者の死にかかわり、看取ることで生じる看護師個人の死や提供したケアへの考え」を省察するプロセスにおいて通常とは異なる気付きを促せるような話し合いの機会を持つことが重要であると考えた。そのため、これらを意図した教育プログラム案を大学教員、がん看護専門看護師兼がん看護専門看護師教育実践者らの協力を得て作成し、実施した。

結果、研修会前後に行った看取りのケア尺度、The Nurses' Involvement in Patients' Dying and Death Scale(NIPDYDS）などの得点には大きな変化はみられなかった。しかし、自由記述から今まで意識してこなかった自己の死への態度を立ち止まって考えることの新鮮さや自己の考えを改めて自覚したこと、他者の意見を聞くことでの発見や新たな気づきが促されたことから一定の効果がみられた。特に、病棟などで実施しているデスカンファレンスとは異なり、ケアを振り返るなかで職場以外の人と、利害関係のない自由の話し合いの機会を持てたことは正解のない死への態度育成を検討する上では有効であった。しかし、患者の死をどのように看取るべきであるかということにも正解がないため、看護師個人が思い描く結果が得られなかったときは、自己を責めることに専心してしまう傾向がみられた。よって、異なる角度からの省察が重要であると考えた。そのためには看護師として患者を看取るなかで自己の提供したケア行動について、良かった、悪かったと早急に答えを探すのではなく、思うような効果や結果が得られない場合においては、患者やその家族とともにその状況に身を置き、ともに耐えることもケアであることに気づけるようにすることも重要であるといえる。このことは看護師の死への態度育成を検討する上でも重要であるため、次回以降はこの点を踏まえ、より新たな省察や気づきを促す機会を設けることができるよう、通常とは異なる角度からの省察が期待できるよう教育プログラムの修正をしていく。さらに、今年度までに実施できなかった学術集会や研究会での交流集会においてワークショップとして実施し、内容をブラッシュアップさせ、実用化を目指していけるようにする予定である。

＜引用文献＞

・吉岡さおり，小笠原知枝，中橋苗代ら（2009）：終末期がん患者の家族支援に焦点を当てた看取りケア尺度の開発，日本看護科学学会誌，29（2），11-20
・Makiko Kondo, Hiroshi Nagata（2015）：Nurses' Involvement in Patients' Dying and Death: Scale Development and Validation, OMEGA-JOURNAL OF DEATH AND DYING, 70(3), 278-300
・坂下恵美子（2008）：終末期がん患者の看取り経験の中に存在する看護師の心の壁の検討，愛媛県立医療技術大学紀要，5（1），25-31
・唐沢穣（2010），第 6 章態度と態度変化　感じ考えたことが行動となって現れる，池田謙一，唐沢穣，工藤恵理子，村本由紀子，社会心理学，137-158，有斐閣，東京
・吉田みつ子（1999）：ホスピスにおける看護婦の「死」観に関する研究　"良い看とり"をめぐって，日本看護科学会誌，19（1），49-59
・坂口幸弘，野上聡子，岸田紀子ら（2007）：一般病棟での看取りの看護における看護師の

ストレスと感情体験，看護実践の科学，32（1），74-80
・岡本双美子，石井京子(2005)：看護師の死生観尺度作成と尺度に影響を及ぼす要因分析，日本看護研究学会雑誌，28（4），53-60

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Yuko HIrano　Haruka hino
２．発表標題 Difficulty Felt Toward Patients in the Gear-Changing Phase by Young Nurses Working in Wards
３．学会等名 EFONS2025（国際学会）
４．発表年 2025年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関